

教祖140年祭 三年千日の 活動方針

「教祖のひながたを目標に 全教会心定めの達成」めどう



大教会のHPがご覧になれます！
月報には掲載されない写真もいっぱいです！
ぜひ一度ご覧下さい♪

11月 月次祭

世話人 久保善平先生 御巡教

◆おちばの理を頂戴し、勇みの種を頂いた。

～教祖140年祭～

立教189年1月26日

※年祭当日（1月26日）の別席・お誓いはありません。

その日以外は通常通りです。

網走月報

発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

大教会十一月月次祭

大教会11月の月次祭は、12月午前9時30分から大教会長祭主のもと、執行された。

大教会長は祭文で、親神様の御守護に御礼申し上げた後、「今日のこの日は、有難くも世話人久保善平先生の御巡教を賜り、おつとめ奉仕者を先頭に、参拜者一同心を揃え一手一つに十一月の月次祭をつとめさせて頂きます。また、月の初めには、第五回ようぼ

く一斉活動日に、網走に繋がる用木が挙つて参加させて頂きましたこと心より御礼申上げます。私共を始め教会長ようぼく一同は、年祭活動もいよいよ残すところ三ヶ月を切るなか、諭達の実働に拍車をかけ、心定め達成へ向け、年祭当日まで走り抜ける覚悟でござります。」と奏上した。その後座りづとめ・十一下りのてをどりがつとめられ、参拜者は共に勇んでみかぐらうたを唱和した。

を偲ぶためにつとめる年祭とは意味合いが異なります。

教祖は、お姿こそ私たちの目に見えませんが、今もなおご存命でお働きくだされます。ですから、年祭という同じ言葉を用いているものの亡くなられた方、故人を偲ぶ年祭とは明らかに違いがあります。

明治二十年陰曆正月二十六日。「世界一れつの人間をたすけたい」との思召しから、二十五年先の定命を縮めてお姿をお隠しになられた子供可愛い一条の親心にお応えさせていただきたいと、この道を歩むお互いが成人の歩みを進めようとの思いで、一手一つにつとめ励むところに教祖の年祭の意義があるということは、皆さんもよく承知してくれます。

ただいまは、結構に網走大教会の十一月の月次祭に参拝させていただきました。誠にありがとうございました。

また、常日頃はそれぞれの持場立場で、道の御用の上にお励みくださいまして、誠に



神殿講話抜粹

神殿講話

世話人・久保善平先生

「三年前の十月二十六日、二論達第四号」をご発布頂いて以来、私たちは教祖百四十年祭を目指して歩みを進めてまいりました。その教祖百四十年祭まで、いよいよあと二ヶ月となりました。

教祖の年祭は、私たち人間が故人となつた親やご先祖様

元々は教祖の年祭も、皆、我が事としてつとめておられたと思います。しかし、教祖が現身をお隠しになられてから年月が経つにつれ、教祖についての考え方も少しずつ変わつてきているような気がいたします。

今申した、教祖の年祭の意義は知つていながら、大切だと思いながら、どこか我が事から遠くなつてきている気がするのです。

真柱様は、立教百八十五年、年頭のご挨拶の中で「私たちが先人の苦労を忘れ、結果として、教祖が遠くなつてしまつたというところがあるのではないかと思うのであります」とお話をくださいました。

私自身の常日頃の通り方の中でも、父や母の姿勢と比べると、教祖が遠くなつてゐるのではないかと反省をするところがあるので、教祖の年祭とは違うんだといふことを強調するがあまり、人間の年祭とは違つてゐる、そんな感じがいたしました。

が教祖が現身をお隠しになることに繋がるとは思いもせず、くだされたい」と返事をなさる事であります。

教祖が人々に急き込まれていたのは、何が何でもおつとめをつとめるということでありました。しかしおつとめをたすけてくださつた何よりも大切な教祖は、生き神様である教祖が連れて行かれる。しかもその教祖は、ご高齢でご身上であります。だからそれだけはどうあっても避けたいし、避けなければならない」との考えがあつたのだと想像いたします。

教祖の身を慮るが故の人々の思案と、おつとめを実行すること、教えを教え通りに実行することを何よりも求めらる教祖の思召とは、同じような方向を向きながらも大きな開きがあつたと言えるでしょう。その開きが、教祖と

初代真柱様との問答などを通じて、少しずつ縮まつてきました

こうして、いよいよ正月二十六日を迎えることになりました。二十六日はそれまでも、毎月おつとめをつとめてきた日ではありますたが、人々はこうした状況の中でもつとめることは、教祖がお望みくださいつてゐることだ、大切なことを強調するがあまり、人間の年祭とは違つてゐる、そんな感じがいたしました。

明治十九年陰曆十二月八日の夕方、教祖は風呂場からお出ましの際にふとよろめかれました。そして陰曆十二月

そこで頂いたお言葉は、「もう悠長なことを言つてゐる場合ではない。お前たちは法律が怖いのか、神の話が尊いのか、どちらに重きを置いて信心しているのだ。親神の思案に暮れ、神様の思召を伺われました。

人々はこれでいよいよ心が定まり、初代真柱様の「おつとめの時、もし警察よりいかなる干渉あつても、命捨ててもいふ心の者のみ、おつとめをせよ」との言葉のもと、意を決しておつとめにかかりました。

この時のおつとめは、形の上では必ずしも教えられた通

供である私たちが、陽気ぐらしへの道を誤らずにたどれる道を歩んでくださつたひなたの親が教祖であります。つまり、教祖は私たちみんなの親であらせられる。自分の親なんだ。こうしたことは何よりも大事にさせていただきたいと思います。

人間の年祭は、故人が出直された日を基準につとめるのですが、教祖の年祭は、教祖がお姿をお隠しになられた日が元一日であります。教祖百四十年祭が近づいた今、今一度、明治二十年陰曆正月二十六日に思いをいたしてみたいと思います。

陰曆十二月二十日には、初代真柱様が直接教祖と問答を仰せと國の掟と、両方の道の立つようにさしづをお願いします」と自らの苦しい胸の内を打ち明けられました。

すると教祖は、「親神の話をしつかり聞いて心を定める

ことが一番大切なだ。今とわらず、警察がやつてくることはなかつたのであります。

それは、ちようど十二下りの最後のお歌が終わる頃、教祖が現身をお隠しになられたとあたつては、心を定めること

が一番肝心である。心さえ定まれば、道はいづれ開けてく

障子を開けては叱られたんだと語り遣しておられます。

正月二十六日のおつとめは、もちろんちばのところでつともめられました。今、記念建物の一つとして残されているつとめ場所は、かんろだいがここにあつたという場所が建物の中にあります。これは後に増築をされて取り込まれたのであります。明治二十年の時から國々ができる人々が親神様から身体を借りて生活をしている。その人々が住み暮らしやすいように申

めました。

おひさ様が言われるには、陽気なおつとめの声を聞いて、教祖は心地よさそうにお休みになつておられたので、おそばにいたおまさ様は参拝に出

ていただきました。

そして、「だいくのんもそろひきた」と十二下り目が終わる頃、教祖がちょっと変なそぶりをなされたので、おひさ様が「お水ですか?」と尋ねたが返事はなく、それで水を差し上げると三口召し上がれました。「おばあ様」

おひさ様が言われるには、「冷たいんやな。おばあ様はもの言わはらへんねがな」と言われ、おひさ様から「おばあ様がこんなになられた」と想像をいたしました。

しかし結果は違いました。たまへ様がお部屋を覗くと初代真柱様に、「早よ来い」と呼ばれ、おひさ様から「おば

ません。そこで「誰か居ません。早く真之亮さんを呼んできてください」と呼ばれたのであります。そうこうしてお話を聞いて地を均らそうか、扉を開まりて地を均らそうか、

人々は飯降伊藏先生を通してから國々ができる人々が親神様から身体を借りて生活をしている。その人々が住み暮らしやすいように申

めました。一同は、扉を開く方

が陽気でよかろうとの思いがあつたのか、まさかそのこと

ではありません。

たまへ様は「子供心に、今にも天地が闇になるかと思ひながら、まだ明るいまだ明るいと思つた」と語られていた

たまへ様は「子供心に、今

にも天地が闇になるかと思ひながら、まだ明るいまだ明るいと思つた」と語られていた

たまへ様は「子供心に、今

教祖殿には毎日たくさんの人
が参拝に来られます。参拝に
行つた時、合殿にも御用場に
も、自分以外に誰も人がいな
いということは、日中ならあ
まりないような気がいたしま
す。参拝に来られる人の中に
はお札を申し上げる人、相談
をなさる人、また縋りつくよ
うにたすけを求める人など、
いろんな方がおられるでしょ
う。

私も、その時その時で中身
は異なりますが、いろんなこ
とを申し上げてているのであり
ます。教祖なら何でも聞いて
くださるに違いないと思い、
人には言えないことでも申し
上げることもあります。

そうして参拝をしている時、

きるのだと思います。ここで私が初めて、にをいがけおたすけに際して、教祖のお働き、またぢばのありがたさを実感した話を少しさせていただきたいと思います。

私は生まれた時からお道の環境の中で育ち、高校まではずっとおぢばの学校に通つていましたから、言葉の上では少しは教えを知つているつもりであります。そうした中、二十四歳の時に布教の家に入れてもらいました。三十年以上も前の話です。

布教の家での一年間は、人をお連れしてでなければおぢばへ帰ることができません。いくら通い先ができる、「是非おぢばへ帰りましょう」と

ちくだされています。 私たちはその親の元へ、すなわち親里へ、親を慕つて、親を頼りに、真実の心を持つて帰らせていただくのです。それがおぢば帰りです。

こうして帰つてくる子供と帰りをお待ちくださる親の双方の心が通い合う時に、親神様は不思議なめずらしいたすけをお見せくださるのであります。私も、そういう話は何度も耳にしたことがあります。でも実際に、そのありがたさを肌で感じたことは、それまでは一度もなかつたのであります。

ちょうど、教祖百十年祭の三年千日の一年目でした。布教の家にいたおかげで、年祭

活が終わる三月になつて、ようやく通い先の人がおぢばに帰つてくれるこことになりました。その方は、ひどいヘルペスを患つておられまして、家にいて話をしていても、十五分と話をしていると、一度は必ず痛さで顔を歪めるという感じであります。毎回おさづけの理を取り継がせていただくのですが、「おかげで痛みがマシになつた」と言つてくださる日もあれば、「揉んでもらつてもあんまり変わらない」と言わされることもありました。

そうです。そして、長らく閉め切られていた襖が開けられた時、そこでは榎井伊三郎先生、梅谷四郎兵衛先生のお二人が泣き崩れておられたのであります。

また、その日のおつとめに出ておられた高井直吉先生の思い出話によると、「この日は公然と日中におつとめをし、たくさん的人がお参りしたのに、最後まで一人の巡査も来ず、不思議なことだったと喜んでいたところ、「今教祖がお隠れになつた」との知らせが入つた。お参りに来ていた人たちは口々に「ワー」と言つたがそれきりで、後は誰も何も言わない。黙つてしまつて、咳一つする者もなかつた。そんな様子だつたようです。

またご休息所の縁側では、郡山の初代・平野櫛藏先生が、「俺はうちへ帰れん」と頭を抱えておられました。高井先生がその訳を尋ねると平野先生は、「教祖は百十五歳が定命とおつしやつた。俺は、めつたに神様の話に間違いはない。きっとよくなると信じていたし、人々にも話をしてきた。

までとこれから先とどう違つてくるかしつかりと見ていいよ。昨日、扉を開いて地を均らそらそうかと尋ねた時に、開いてくださいと言つたではないか。親神は心通りに守護したのである。さあ、これまで子供にやりたいもの（これはおさづけのことです）もあつたが、思うように授けることができなかつた。これから先だんだんに渡していこう」という意味のお言葉を頂戴なさつたのです。

このお言葉を通して、教祖は子供可愛い故に姿を隠されたこと、たとえ姿を隠されても世界を駆け巡つて一れつをたすけるためにお働きくださること、つまり、これから先は扉を開いて世界たすけにご存命のままお働きくださることをお教えいただいたのであります。

このことが人々の心に治まるまでには、時間を要したかもしれません。しかし「扉を開いて働いてくださる」「姿は見えないけれど働いてくださる」ということを頼りに、ご存命の教祖をお慕いして通るという言即坐勢^{シテ}、この時

から始まつていつたのです。
今を生きる私たちも、「教祖は人々の心の成人を促そう」と、その現身をお隠しになら、世界だすけにお踏み出しぐだされたんだ」「教祖はお姿こそ挙せないものの、今尚ご存命でお働きくださつているんだ」と聞かせていただきそのことを信じてこの道を通つているのです。
しかし、教祖はご存命だということを信じることは、年月が経つとともに難しくなつてきているのではないかと思うことがあります。また、それを信じる力が年々弱くなつてきているということも否定できないように思います。

先ほど来お話をした事柄は、教祖五十年祭の頃に二代真柱様が、たまへ様や高井先生に聞かれたのであります。その頃はまだ、明治二十年の様子を直接知つている人が、少ないながらも残つておられまし

た。

それから九十年近くが経つてゐるわけですから、もちろん今は、明治二十年を知つてゐる人は誰もいません。教祖五十年祭の頃の様子をはつきりと現すことは、もう不可能

とんどおられないでしよう。それでも教祖は、今なおご存命でお働きくださっているのです。そのお働きは、お姿をお隠しならで以来、少しも変わっていないのです。そのことをひたすら信じて通ることが、私たちの信仰の源であると申したいのです。

さて皆さんは、初めてお立ちに帰られる方を案内する時本部の教祖殿で、教祖のことなどをどのように説明されるでしょうか。もちろん、月日のやしろとして親神様の教えを私たちに教えてくださった方である、ということはお話をされるでしよう。そして、今もご存命でお働きくださっているんだ、ということも必ず説明をなさると思います。

今もここにお住まいくださって、三度のお食事からお風呂、ご寝室に至るまで、お姿があるのと同様になさっているんですよ、というようなことを説明されるのではないでしようか。その時、教祖のお社の前に赤衣が見えれば、そのことにについてお話をされる方もあるかと思います。

教祖がご存命でお働きくだ

でも親は、このままでは子供の為にならないと思うから意見をするのです。憎いから注意をするのではありません。嫌いだから叱るのでもあります。それは、可愛いからこそ、子供のためを思うからこそ、その行いなのです。

親神様、教祖も同じだと思います。私たち一人一人の、いんねんも含めたこれまでの通り方を見て、また、将来まで見据えた上で、その時その時にふさわしいことを教えてくださるのです。

褒めてくださる時は、嬉しく姿を見せてくださるので

繰り返しになりますが、教祖は私たちの親であらせられます。だから、親を慕えればいいのであります。お姿が見えないから、お声が聞こえないからといって、距離を感じす

仕上げの年 諭達の実動十万件

実動件数
234,066 件
(11月11日現在)

| 立教188年人のご守護心定め | | | |
|----------------|------|--------|----|
| 初席者 | ようぼく | 修養科修了者 | 教人 |
| 51名 | 23名 | 18名 | 6名 |
| 成 果 (11月末現在) | | | |
| 25名 | 11名 | 16名 | 0名 |



「ほんまに鮮やかやなあ」と思わずにはいられませんで
した。おぢばに帰つてください
さつたことに、親神様、教祖
の元に帰させていただいたこ
とに、鮮やかな印をお見せく
だされたのであります。

「親里ぢばはたすかるとこ
ろ、たすけてくださるところ
というのは本当やな。親神様、
教祖は、子供が帰つてくるの
を楽しみにお待ちくだされ
いるというのはほんまなんや
な」と心からそう思いました。
それ以降も、こうしたあり
がたさを感じることに出会つ
てはいるのですが、最初に実
感できたのはこの出来事だつ
たよう思います。

やはり、頭で理屈を考える
だけでなく、にをいがけ・お
たすけに一生懸命になつてい
る時にこそ感じさせてもらひ
やすいよう思います。

かこたり、教祖にお喜びいただきたい、という心がいつの間にか薄くなつてしまつたりります。今回でもまだまだできてない、そう思つています。私は教祖百年祭の時の母親の姿が忘れられません。当時は一月二十六日から二月十八日まで、年祭の期間として毎日おつとめがつとめられていました。初日と最終日のどちらの日だったかは覚えていませんが、おつとめの時に母がポロポロと涙を流していました。それが忘れられません。なぜ涙を流していたのか聞いていないので分からぬのですが、きっと教祖をお慕いするからこそ涙、一生懸命通つてその日を迎えたからこそ涙だつたと思つています。母も、もちろん教祖をその目で見たことはありません。でもそして涙を流せらるるがうそ

今私たちちは、「おやさま」という字を書いています。を漢字で表す時には「教祖」という字を「おやさま」と読むことは、今から八十年近く前、現在の「天理教教典」が作られた時からだと聞いています。それまでは「おやさま」中山みき様のことを「教祖様」あるいは「おやさま」とお呼びすることができたのですが、「教祖」という字と「おやさま」という呼び方をつなげたのはこの時だったようです。ある辞書を開いてみますと、「教祖」という言葉の意味は「ある宗教、宗派の創始者。開祖」と記されていました。教祖は、親神様の御教えを私たちに伝え、この道をおつけくださった方でありますから、「教祖」であります。また「おやさま」は私たちの親ぞ。おやさまは私たちの親ぞ。

さつた「おやさま」は私たちの親なんだという親しみをもつと持つてもらいたい、という思いからだつたのではなかと思つてゐるのであります。

これも二代真柱様の著書である『続ひとことはなし』と、いう本の中に、教祖がお姿を隠される前は教祖のこと、「おやさま」あるいは「かみさま」と申し上げていた、と古い先生が語られていたと記されてゐます。

さらには教祖殿にお参りすることを、「おやさんへ参る」と言つたりもしていた、とも記されてありました。「おやさん」というのは、「おやさま」がなまつた言葉だと思ひます。「おやさま」「おやさん」という呼び方にはどこか私は温かしさを感じます。私にとつてもこの「おやさん」というのは子供の頃から耳慣れた懐かし

は厳しく、でも温かく、深く
広く、親心いっぱいで私たち
を見守つてくださつていると
信じています。

おふでさきに
にんげんのわが子をもうも
をなぢ事 こわきあふなきみ
ちをあんぢる (七一九)
というおうたがあります。

私は、親神様・教祖と私たちの関係を、人間の親子の関係と同じように考へると分かりやすいし、神様の親心も想像しやすいと思つています。

私たちが自分の子供のこと
を大切に想い、いろいろと心
配するのと同じように、親神
様、そして月日のやしろたる
教祖も、我が子である私たち
のことを可愛く想い、神様の
目から見て、危ない道に彷徨
うことのないよう、あれこれ
とお心を配つてくださつて
いるのであります。

氣が付きました。「そういえば、この人この二日間一言も痛いと言わんかったな」と。そのことを本人に伝えると、とても不思議そうな顔をして、「そういえばそうやなあ。全

年祭と年祭の経験いたしました。どの年祭も与えられた持場立場で、意識をして務めさせてもらつたつもりであります。しかし、振り返れば反省ばかりです。こうして通らせ

す。お姿を知らないから、お声を知らないから信じきれないと、慕う心が弱くなる、と言つてゐるようでは、後々の人が安心して通れるようとに、五十年のひながたを残してください

「おやさま」と呼びするのではなく
「おやさま」という意味と「親」の
二つを結びつけられたのです。

はしていませんが、きっと今
でも知らないうちに自分で口
にしていることがあると思いま
す。

最初の方にも申しましたが
私は教祖は私たちの親だと
思っていま。混ざつて

▼直轄所属・三幣晶の靈様の5年祭が11月30日、大教会の祖靈殿にて大教會長祭主のもと執行された。

11月人のご守護

○初席者
○中席者
○おさつけの理拝戴者(5名)
○修養科修了者
(12名)
直直直直直
誠誠誠誠誠
轄轄轄轄轄
山米田瀬瀬倉宮宮奥山
崎田中川川井本本村崎
邦裕とく江一
夫子繁
直直直直直
誠誠誠誠誠
轄轄轄轄轄
倉宮宮奥勝山
井本本村又崎
謙大邦(6名)
悠千加子武一
大輔夫介子
好美聖花平
遼介子聖花平

| | |
|---------|--|
| 13 日 | 役員会会議。連絡会 教会长夫妻練り合い。 修養科事前研修会よ ろこびセミナー（15 日まで） |
| 15 日 | 会長、おぢばがえり、 少年会おとまり会 (16日まで) |
| 16 日 | 会長、板倉知雄先生 20年祭参拝。縦の伝 道日 |
| 17 日 | 網走支部婦人会例会 会場 |
| 21 日 | 会長、札幌方面信者 宅まわり(22日まで) |
| 22 日 | 修養科事後研修会ひ ながたセミナー（23 日まで） |
| 23 日 | 会長、おぢばがえり。 詰所23会。縦の伝道 日 |
| 24 日 | 会長、本部神殿奉仕 つとめる |
| 26 日 | 本部月次祭遙拝。会 長、教区主事会出席。 結城和広役員、本部 神殿奉仕つとめる |
| 27 日 | 会長、かなめ会出席。 藤山重善役員、本部 神殿奉仕つとめる |
| 29 日 | 大教会一斉活動日。 みそか会 |
| 30 日 | 会長、三幣晶の靈様 5年祭祭主つとめる |

立教188(令和7)年人のご守護成果表 (11月末現在)

秋季大祭 11/12(日)

| 〈参拝者数 約120人〉 | | | | | |
|----------------------------|--------------------------------------|--------------------------|-------------------------------------|---------------------|-------|
| 神殿講話 | 贊 者 | 指図方 | 扈 者 | 祭主 | 祭 員 |
| 久保先生 | 遠藤澤安岩清 浩春光信 二雄広繁喜 | 結城 和広 | 小大松 篤雅人 | 大教會長 | 祭員 |
| 胡三 味琴 弓線 | 小す太拍ち りや が子ん笛 鼓ね鼓木ん | 地 方 | | てをどり | 祭典役 |
| 藤澤丸 山田山の 道裕のり 子子子 | 大結藤丸澤瀬 山城山山田川 雅和重一忠定 人広善徳和自 | 栗三久 林幣保 徳正先 志生 | 藤三 井幣 教會長 道輝惠子 | 大教會長 新川正 善信人長 | 座りづとめ |
| 結斎藤 城藤山 美和知真 子子理 | 遠小桐遠青小 田針谷藤山松 眞敏善明正篤 明文広博志 | 新菅三 川原幣 正明正 美広志 | 青三山 山澤崎水村幣 由聖美萬信光教 子子代喜正志 | 前半 | 割前半 |
| 栗眞 林壁 美直香 美織子 | 遠安清永三村 藤田水井澤井 浩光知康春 二広幸幸雄実 | 三清眞 幣宮壁 敦秀正 明教 | 新三瀬栗奥岩 川幣林野原子 穂有祐徳直 子子子正治繁 | 後半 | 半 |